

ちきゅうTALK

2020 Special issue Abiko Culture & Talk (ACT)

22-28 Tsukushino 1 chome, Abiko, Chiba 270-1164 JAPAN Tel/Fax 04-7184-9828

新型コロナウイルス

COVID-19,

ニューヨークで考えること

MEGUMI (ニューヨーク市在住)

筆者がこれを書く今現在、ニューヨークでは COVID-19 が蔓延中である。3月1日に市内で感染が初めて確認されてから、1ヶ月以上が過ぎている。ここ数週間で、市内での生活が驚く程変わってしまった。筆者はニューヨーク市立大学とニューヨーク市公園レクリエーション課でデザインやアートを教えている。3月16日に公立学校が一時休校になったことで、仕事はオンラインに移り、筆者も自宅待機中である。

「NYS on PAUSE」という州からの要請が出され、3月22日に食料品店、薬局、銀行、郵便局等を除いて、その他の業務は一時休業になった。一夜にして失業手当が必要となった従業員が数えきれない程いる。日を迫うごとに、増える患者数と死者。そして、爆発的に増え続ける入院患者に、市内の病院の受け入れ態勢が着いていけないと州知事も市長も連日話していた。ジャビッツセンターに仮設の病院をつくり、患者2500人受け入れ可能にした。アメリカ軍の病院船、コンフォートも患者、1000人が収容可能だ。市内5区で更に病床を増やす計画も発表されている。

ニューヨーク市にある JFK 国際空港は、北

米で一番国際便発着の多い国際空港として知られる。又、全米で最も人口密度が高い街でもある。アメリカと欧州間の行き来は多く、実際、市内の3分の2の感染がヨーロッパ経由だと言われている。又、カリフォルニアが自宅待機を要請した4-5日後に、ニューヨークは、ニュージャージーとコネチカットと共同で、同様の要請を出している。その数日の遅れが、少なからず関与している可能性もある。これらの情報は将来、感染症の対策を考える上で重要になるだろう。

ニューヨーク市内の公立学校が休校を躊躇っていたのも、貧困層の児童の行く場所や食事がなくなってしまうと危惧された経緯がある。これは、日本国内でもフリースクールが、出来る限り児童の為に運営を続けたいと発表していたのと似ているのではないかと思う。

COVID-19が中国・武漢から来たとの理由で、アジア系コミュニティが差別に晒され、3月以前から問題になっていた。自身の差別の経験を掲載した日本人ライターもいた。又、ニューヨーク市内で移民の多いクイーンズ区では、確認された COVID-19 の患者数も市内で一番多い。一軒のアパートを多くの人がシ

ェアすることで、社会的距離を取るのを不可能にしたり、リモートワークの出来ない必要不可欠な業務に従事しているからではないかと言われている。シカゴでは、COVID-19 の患者の性別・年齢の他に、人種の統計をとり発表している、黒人の死者が桁外れに多い。患者の人種の統計を取るよう求める声も多く出ている。

巨大災害は、社会に蓄積されたひずみや問題をいや応なく顕在化させる。COVID-19 関連の報道を見るたびに、筆者はそう痛感している。COVID-19 の蔓延で、自宅待機要請が出る中、世界各国でドメスティック・バイオレンスの被害が報告されている。フランス等は被害者がホテルに滞在出来る様手配すると発表した。COVID-19 の感染を防ぐ為、出産する女性に付添人の立ち入りを禁止にした病院もあり、妊婦に不安を与えている。国民皆保険のないアメリカの問題は世界でも知られていて、世界的に見ても、今後、医療体制の脆弱な国・地域は大きな問題に直面していくのではないだろうか。

筆者のバンクーバー（カナダ）出身の生徒は帰郷し、今2週間の自宅隔離中である。又、ドイツ人の友人は先週ベルリンに帰った。3月上旬にニューヨークに来ていたのに、自宅待機で会えなくて残念だった。友人・知人がいなくなる様で物悲しくなる一方、皆が安全で健康でいてくれれば、それでいいではないかと思う。元気であれば、又会えるのだから。

筆者の生徒の1人は市内の病院で研修医をしている。彼女の病院でも2週間前に亡くなった看護師がいた。医療用マスクやガウンが不足していたとニュースで知った。彼女は整形外科医なので、ICU の経験は数年前に2ヶ月程したのだそうだが、感染症の COVID-19

の患者を看られるか、実のところ自信がないと話す。5月にICUでCOVID-19の患者を看る必要が出て来るだろうが、5月にはある程度事態は収束しているかと思う。

この報告を書く間にも、オレゴン州の友人から大学時代の友人がCOVID-19にかかりインドネシアで亡くなったとメールで知らせを受けている。友人は非常に悲嘆にくれている。30代で亡くなった彼の友人。当然だ。「もう、会えないと思うと悲しい。」多くのニュー Yorker が COVID-19 に感染した誰かを知っている。

平穏な日常が早く戻って欲しいと願う一方で、この危機が通り過ぎた時にはどの様な日常が戻るのだろうか。世界が直面する問題は山積していて、更なる解決の努力を続けなければいけないのは明らかである。筆者は十代の時に聴いた The Yellow Monkey の JAM という曲の“外国で飛行機が落ちました ニュー スキャスターは嬉しそうに「乗客に日本人はいませんでした」という歌詞を思い出す。発売されて20年以上経つこの曲を聴くのは、自国・自分の民族という枠組みを超えて、他国・他民族のことを思いやり協力し合う必要があると考えるからである。 ■



筆者 (MEGUMI) プロフィール

2013年よりNY在住。現地の大学などで美術を教える傍ら、詩選集を出すなどアート分野で意欲的に活動する。2020年度 Art Students League of NY Red Dot 賞受賞。